



灯台の横には往復1時間程度の遊歩道が整備され、青い空に映える紅白の灯台を眺めながら、気持ちのよい散歩を楽しむ。年に数回のイベントでは「石狩灯台お兄さん（左）」に会うことができる。



変わる海岸線、変わらぬともしび

取材・文 大迫理沙

協力 工藤義衛(石狩市教育委員会)

高木順平(「石狩灯台お兄さん」依り代)

石狩灯台は、今から約120年前の明治時代に、石狩川が日本海へと注ぐ河口のすぐそばに建設された。しかし、令和の今は河口から少し離れた内陸に位置している。その理由とは？

「石狩＝鮭」のイメージ

もしも北海道で「石狩弁当」という駅弁があったら、中には何が入っていると想像するだろう？石狩市の学芸員・工藤義衛さんによれば、この質問に9割以上の人は「鮭」と答えるそうだ。

「石狩＝鮭」のイメージの原点は江戸時代にさかのぼる。当時、本州では蝦夷地の鮭が贈答品として使われていた。石狩川流域で取れたものが河口の港で集約され、石狩湾から本州に出荷されていたのだ。

動く河口と灯台

石狩灯台は、鮭漁が最も盛んだった明治時代に石狩川の河口に建てられた。北海道で現存する最古の灯台である。ただし、現在では灯台は“内陸”に位置している。建設当初（1905年）には河口にあった灯台が、今は河口から2キロメートルほど離れているのだ。

もちろん、灯台が歩いたわけではない。石狩川が運んでくる土砂が原因だ。土砂が河口付近にたまり、河口が少しずつ北側にずれていく。相対的に、灯台は河口から離れ、南側の内陸に移動した

ように見えるのだ。

石狩川の河口は、河川環境も不安定だった。冬には凍結する一方で春には雪解け水が増える。海岸付近の水深が浅いため、大きな船は着くことができない。こうした地理的条件もあり、物流拠点次第に小樽方面へと移り、石狩灯台は「物流拠点としての石狩川河口を照らす」という一つの役割を終えた。

新しいムーブメント

時代の移り変わりを見守ってきた石狩灯台に、近年、新しいムーブメントが起きている。

「石狩灯台お兄さん」（石狩市非公認キャラクター）の登場だ。石狩灯台の紅白模様をモチーフに、全身を紅白で彩り、190センチメートルの長身に灯台を模した帽子をかぶる。SNSやメディアで話題となり、灯台を活用した地域活性化にも一役買っている。新たな役目を担う石狩灯台のともしびは、まだ消えていない。「石狩弁当」の中身を鮭と白米の紅白弁当とイメージする日も近いかもしれない。

灯台へは札幌駅から車で50分、その他公共交通機関あり。